

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨祭(5/23)礼拝

使徒ペトロの物語

ルカ福音書第22章31節～34節、
使徒言行録第2章1節～6、14節、22～24節、32節～39節

【聖書】

ルカによる福音書 22:31 「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。32 しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」33 するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。34 イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

使徒言行録 2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。5 さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6 この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。]

14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。

「(略) 22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりです。23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。(略)

32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。33 それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。34 ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言って

います。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。

35 わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。』

36 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」37 人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。

38 すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。39 この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

1 一人の使徒の物語

人は、それぞれストーリーをもっており、そのストーリーの中で世界を理解する、と言った人がいます。なるほどなあ、と思いました。これは以前、中村定治兄が証として書かれていた事ですが、戦前の軍国教育を受けた中村兄は、「日本は、万世一系の神である天皇が治める国である。天皇の為に命を捨ててこそ、日本人だ。天皇陛下のために立派に戦死したら、英霊なる神となって靖国に祀られる」というストーリーの中で、世界を理解し生きていました。戦前に教育を受けた人の大半は同じだったでしょう。しかし、1945.8.15 日本の無条件降伏を境に、「天皇は神である」という権力者達が作り上げたストーリーは瓦解します。戦後の混乱期、新たなストーリーを見いだせずにいる兄弟は、映画でキリストを知り、教会に来るようになります。そこで喜田川広先生に出会い、洗礼を受けました。そして全く新しいストーリーに生きるようになります。「天地万物を造られた全知全能の唯一の真の神がおられる。この神は、独り子をお与えになるほどに、自分の事を深く愛してくださる。何の功績がない者の為にも、子なる神が命を捨てて下さる」というものでした。中村兄の世界は大きく変わります。それは中村兄だけではない。私自身もそうです。40歳まで、私は、「人生の主人はその人自身。だから、人はより高い地点を目指して努力せねばならない、そうできない者は価値なき者と言われても致し方ない」という神がいないストーリーに生きていました。ですが、この私のストーリーは、教会の礼拝に出席し、聖書を読むようになり書き換えられました。私の世界も変わりました。

これは、中村兄や私だけではありません。今朝の聖霊降臨祭の礼拝に招かれ集められた一人一人がそうです。この中にはクリスチャンホームに生まれ

育ち、世界が変えられたという明確な自覚がない方もおられるかもしれませんが。しかし、試練の中で「イエス・キリストは今も生きておられ、自分に働きかけてくださる」と確信する経験を通じ、自分のストーリーを修正し、自分が生かされている世界をより深く理解するようになる、という事はあるでしょう。

この礼拝に招かれている一人一人、世界を理解するストーリーを神によって書き換えられ、自分という存在が変えられた一人一人です。何故なら、聖書にシモン・ペトロを通してその様子が書かれているからです。教会の原点である使徒の物語は、現代の信仰共同体、教会に生きる私たちの物語でもあります。聖霊が降ったペンテコステの日、神によって、イエス・キリストによって新しい自分のストーリーを見出した使徒の物語を、ご一緒に聞いていきたいと思えます。

2 鶏鳴

さて、ルカ福音書22章31節から34節は、有名な鶏鳴のエピソードの導入となっている部分です。鶏鳴のエピソードは、最初の教会で広く語り継がれていた物語であったようで、四つの福音書全てに納められています。しかし、その中でも、ルカ福音書にしか記されていない主の言葉があります。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。」で始まる部分です。私たちは、ペトロと言う名前を聴き慣れています。ペトロは、主がつけられたニックネームであり、本名はシモン。主イエスは、その本名を二度繰り返して呼んでおられます。聖書で二度名を呼ぶ時は、深い愛と親しみを込めている時だと言われています。今、主は想いをこめて、ペトロの心の深い部分に語りかけておられます。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。」と。「篩（ふるい）」というのは、大きなざるのようなもので、収穫した小麦の穂を、実の入ったものと実のない殻とに分ける道具。篩に収穫した小麦の穂をいれ、ぱあーと勢いよくまっすぐ上に放り上げると、実が入っていない軽い籾殻は風に流され外側に飛んでいって地に落ち、実のある重い穂は、まっすぐ落ちて篩の中に残る、という単純な仕組みです。サタンは、主イエスの弟子たちを篩にかけようとしている、信仰がない軽い存在の彼らを、試練という強い風によって巻き散らし、神から遠く離そうとしている、と主イエスは警告されています。ですが、ペトロはその事を認めることができません。「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と断言します。

そう、この時、ペトロをはじめ使徒達は、イエス・キリストの十字架と復

活を全く理解していなかったのです。特にペトロは、約三年間とも言われる主イエスの宣教活動の日々、最も主の近くにいたにも拘らず、主イエスの事を殆ど分かっていませんでした、父なる神についても、知るべき事を全く知らなかった、と言っていいでしょう。

自分という存在を造り養ってくださる父なる神を知らないという事は、本当の自分を知らないという事に通じるのだと思います。そして、裁き主であり救い主である神を知らないという事は、どうでしょうか、自分がどう生きていったらよいか、という事も知らない、と言えないでしょうか。自分自身についても知らない、どう生きていってよいかもわからないのに、知ったもりのペトロ。「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と豪語します。しかし、主ははっきりと静かに仰います。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」「ペトロ、あなたは何も分かっていない。あなたのその決意は、数時間も持たないだろう」。

どちらの言葉が実現したかを私たちは知っています。主はこの後、捕らえられ、大祭司の屋敷に連行されていきます。ペトロも後を追って大祭司の屋敷に忍び込む、しかし、家の者に「あの男の仲間だ」と三度、指摘され、三度とも「あんな男と関係ない」と言い返すペトロ。三度目、主イエスは振り返られて、ペトロをご覧になった、とルカ福音書は語ります。その主の眼差しの内に入れられたペトロは、「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」を思い出すのです。そして、屋敷の外に逃げ出すと、ペトロは大声で泣いた、と福音書は伝えます。

3 十字架、復活、昇天

夜は明けます。明るい太陽の下で絶望は続きます。主は拷問され、十字架に架けられて無残な死を遂げました。拷問と十字架刑でずたずたにされた亡骸は、葬られます。その間、ペトロをはじめ十二弟子の姿をルカ福音書は描きません。彼らは、恐怖に取り憑かれ息を潜め死んだ者のように過ごしていたのでしょ

うです。主を葬った金曜日から三日目の朝、墓に行った女達が、驚くべき事を告げます。主イエスを葬った墓に亡骸はなく空っぽ、そして「あのお方は復活なされた」と天使が彼女達に告げたというのです。ですが、その知らせを受けた弟子たちは、信じる事ができません。暗く重い心をもってエルサレムを立ち去ろうとする二人もいました。しかし、なんと甦りの主は彼らを

追いかけて、エマオへの道を共に歩いて、聖書を取り次いでくださいました。彼らは、夕食の席で主がパンを裂かれて祝福の祈りを唱えた時に、目が開かれ、初めて「主イエスだ！」と気づきますが、主の姿は消えます。急いでエルサレムに戻ってみると、十一人の使徒のうち、主イエスがシモン・ペトロに現れた、という話で持ちきりでした。みんなが主の復活に騒いでいる時、イエスご自身が弟子たちの真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と祝福してくださいます。喜びの再会でした。

それから四十日間、甦りの主イエスは、弟子たちと共にいました。そして次のように教えられます。「聖書には次のように書いてある。『キリストは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる為の悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所の力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」主イエスは、その後、天の父なる神のみもとに帰っていった、とルカは使徒言行録で語ります。

4 聖霊降臨

主イエスの昇天のあと、弟子達は、使徒達を中心に心を合わせて熱心に祈っていました。主が約束された聖霊を、いつ来るともしれない聖霊を、求め祈る日々が続きます。十日間が過ぎ、迎えた五旬祭の日。五旬祭とは、ユダヤ人の祭りで、過越祭から50日目、小麦の収穫を祝う祭りがその起源だと言われています。ついに、父なる神とイエス・キリストのもとから霊なる御神、待望の聖霊が降ります。霊なる御神は、天からの激しい風として下りました。そして、聖霊が注がれた人々は、それまで全く知らなかった言葉を語りだした、と聖書は語ります。そうとしか語りえない不思議な出来事でした。

この出来事を「朝から酒に酔って騒いでいる」と誤解している人々を見たペトロは、十一人と共に立ち、声を張り上げて話し始めます。主が逮捕された時、てんでばらばらに逃げていった使徒たち。ペトロもそうです。そのペトロ達が、今度は仲間の十一人と共に立ち上がります。そして、大祭司の屋敷の者たちの追求に、しどろもどろにしか答えられず逃げ惑っていた彼が、声を張り上げて話し始めます。

何を話し始めたのでしょうか？イエス・キリストなるお方のことです。「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。」この22節から24節を直訳すると、「神があなた方に証明されたこのイエスのことを」「律法を知らない者たちの手を借りてあなたがたが十字架につけたこのイエスのことを」「神が復活させ

たイエスのことを」となります。つまり、ペトロはここで三度繰り返しています。「このイエスのことを」「イエスのことを」「イエスのことを」。十字架にかかって殺され三日目に甦ったイエスのことを、私は語るのだ、まるで、彼以外の事は語らない！という宣言のようです。三度、「あの男を知らない」と叫んだペトロとは全く違うペトロがいます。

しかし、このペトロの説教、そう、これが初めての説教と言ってもよいのですが、この説教を聴いて最も驚いたのは、誰でもない、ペトロ自身だったでしょう。彼は自分の言葉を聴いて、不思議に思ったに違いない、どうして自分はイエス・キリストの事をこんなにはっきりと知っているのだ？と。彼は、自分の内にはない言葉を語っている、いや何者かに語らされている、という経験をしていたのではないかと思うのです。自分の声だけど自分の知識ではない、自分では語りえない事を今語らされている、という不思議な経験であったでしょう。

ペトロの中で働いて語っておられたのは、霊なる御神、聖霊だったからです。4節には「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」とありますが、ペトロのこの説教もそうでした。ペトロが語ったのは当時の彼らが喋っていたアラム語か聖書のヘブライ語であったかもしれない。しかし、その内容は、「ほかの国の言葉」、ペトロを始め人間が知るよしもない、神の国の言葉であったのです。

「神の国の言葉」の内容は、人間的に考えれば、非常に危険なもので、人の言葉とは全く異なりました。主イエスの十字架からまだ二ヶ月もたっていません。しかも、主を十字架につけた張本人である祭司長、律法学者、長老たちの本拠地であるエルサレム。そこで、祭りの為にエルサレムにわざわざ巡礼してくるような熱心なユダヤ教徒たちを前に、「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさった」と言い切ったのですから。しかし、ペトロは全く怖くありません。それは、ペトロが神の国に生きて、父なる神と主イエス・キリストに守られつつ、聖霊から聞いた事をそのまま語っていたから。ペトロは神の、主の、聖霊の喜びに巻き込まれつつ語っていました。

「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と、自分の勇気と信仰の強さを誇り、自分について語っていたペトロ。ですが、ペトロは主の十字架を通じて知りました。自分こそ弱い者であり、自分の力では神に付き従う事もできない、救い主を裏切る罪人だと知り、自分に深く絶望しました。しかし、ここが重要なのですが、自分に対する絶望では終わりませんでした。聖霊を注がれたからです。その時、彼は聖霊によって、真実を知らされました。主イエスの父なる神は、絶望するしかない罪人の自

分を深く愛し、その罪を贖う為に御子を十字架にかけ、三日目に甦らせてくださった。彼は、証をしつつ思っていたでしょう。「ああ、私はこの事を証する為に、主に他の十一人と共に選ばれたのだ。こんな私でさえ、いや、こんな私だからこそ、天の御神はキリストの証人として用いて下さるんだ！」ペトロの喜びのなんと大きかった事でしょうか。ペトロは、聖霊によって、全く新しい世界、神の愛に支えられてある世界を見出したのです。そして、彼のストーリーも変わりました。彼は新しい世界で、新しい自分のストーリーを見出します、イエス・キリストの証人としての自分のストーリーです。

5 主イエスの取りなしの祈り

ですが、私たちは勘違いしてはなりません。ペトロが特別に素直な性格だから、十二人のリーダーとしてみんなをまとめて頑張ったから、聖霊が注がれ、新しくされたのではありません。ルカによる福音書にはそれがはっきりと記されています。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけてることを神に願って聞き入れられた。」あとの主の言葉「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」主イエスはご自身を裏切るペトロの為に祈られました。ペトロ自身の為でもあり、他の信仰の仲間を力づける為でした。ペトロが主イエス・キリストを証し、天の御神を証し、他の者たちに力を与えられるためです。その為に、主イエスは、主の十字架の試練の時、厳しい厳しい絶望の時、ペトロが完全に主イエスの事を忘れてしまわないように、甦りの主と出会うまで、そして聖霊を受けるまで、持ちこたえられるように、と取りなしの祈りを父なる御神にささげてくださいました。使徒ペトロの物語の背後には、常にイエス・キリストそのお方がおられ、ペトロを支えておられたのです。だからこそ、ペトロは、主の十字架と復活の証人として、新しく生まれ変わる事ができました。

6 私たちの物語

この使徒ペトロの物語は、今も、引き継がれ続けています。主なる神によって教会に集められた私たちによって続いています。私たちは、それぞれのストーリーを、神によって書き換えられた一人一人。主イエス・キリストの証人としての物語を紡ぐ者とされた一人一人です。私たちが生きるこの現代日本で、主の証人としての物語を紡ぎ続けます。

このコロナ禍が明らかにした日本の実態は目をおおうものがあります。

故国にいられなくなった難民を、入出国管理局は長期に収容し、人権を認めないひどい扱いをしています。まるで、「日本人であらずば人にあらず」のような振る舞い。また、政府与党は、このコロナ禍においても、消費税を財源に、何百億も使って、病院のベットや医師、看護師を減らす病院に支援金を出す法律を国会で通しました。一方、国民の八割近くが、七月から始まるオリンピック、パラリンピックに反対しているにも拘らず、強行しようとしています。変異株の感染拡大を押さえ込む有効な方策にお金をかけず、ただ国威発揚と一部企業の利益の為に、オリンピックの為に国民の血税を湯水のように使う、長引く緊急事態宣言で生活苦しんでいる人たちの支援はいつも後手。何十億もかけてお友達企業に作らせた各種のシステムは、何の役にも立たない代物。日本の国は崩壊している、と思わせるような事件が続きます。将来になんの希望も見いだせない、現状を見るとうんざりな状況です。

ですが、主イエス・キリストに祈られ、聖霊が注がれイエスの証人とされた私たちは絶望しません。どんなに人の闇が深い状況であろうとも、見えないイエス・キリスト、聖霊が与えられているからです。聖霊の声に耳を傾けて歩むならば、神を見上げ、イエス・キリストの証人となる道を示されるからです。特定の人間に希望を置くのではなく、キリスト・イエスの父なる神に希望を持つ生き方、神の国の生き方を聖霊が教えてくれます。混乱の坩堝にある現代日本にあって、主イエス・キリストを証する者の道を、今週も横浜ナザレン教会の仲間と共に歩んで行きたい、と切に願います。